Bulletin of Aichi Univ. of Education, 60（Educational Sciences）, pp. 53-62, March, 2011

滞日ブラジル人児童のストレスとレジリエンスについての検討

古田　真司*　村田　育世**　水野　由佳里***　原　郁水****　村松　常司*****

*養護教育講座
**豊橋市立南部中学校
***愛知県立豊川養護学校
****横浜市立保土ヶ谷小学校
*****愛知教育大学副学長

Study on Stress and Resilience Among Brazilian Schoolchildren Living in Japan

Masashi FURUTA*, Ikuyo MURATA**, Yukari MIZUNO***, Ikumi HARA**** and Tsuneji MURAMATSU*****

** Department of School Health Sciences, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*
*** Nanbu Junior High School in Toyohashi City, 441-8105, Japan*
**** Aichi prefectural Toyokawa School for the Mentally Retarded, Toyokwa 442-0863, Japan*
***** Hodogaya Elementary School in Yokohama City, 240-0002, Japan*
****** Vice president, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

Ⅰ　はじめに

近年、就労目的で来日するブラジル人が増加し、その家族であるブラジル人児童生徒も急増している。文部科学省の「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受け入れ状況等に関する調査」[1] によると、2008年9月1日現在で、ポルトガル語を母語とする児童生徒数は約11,000人であるが、特定の地区や学校に集中して在籍する例が目立ち、県別に見ると、愛知県が約3,700人、静岡県が約2,000人、三重県が1,000人、以下岐阜県が719人、滋賀県が673人の順で、愛知県を中心とした東海地方に集中し、この５県だけで全体の71.7％を占めている。これに対して、県や市町村の教育委員会は、担当教員の配置や母語を話せる相談員の派遣、担当教員の研修、相談窓口の設置や保護者向けのガイドブックの作成など、さまざまな施策で受け入れ体制を整えているものの[1]、これらが、十分に対応できているとは言えない現実がある[2]。

長野県のブラジル籍児童生徒を調査した熊﨑らの報告によると[2)3)]、ブラジル人児童・生徒の適応に関しては、日本語力不足と、生活習慣の違いの問題があり、学校生活そのものに対する保護者の不安が多く見受けられる。また、日本での生活の不安と、ブラジルへの帰国後の心配など子ども将来に対する不安の声も多く寄せられている。一方、学校側からは、家庭との連絡の取りにくさの指摘が最も多かった。保護者の日本語能力不足に加え、労働時間の問題で連絡が取りにくいという点も指摘されている。

こうした適応の問題に加えて、学童期における大きなストレッサーの一つであると言われている「いじめ」の問題がある[4]。日本には、社会的要因として同質性を求め異質なものを排除しようとする国民性があり[5]、古くから、学校現場で見られる子どものいじめの理由の一つとして、「異質者排除」があげられている[6]。ブラジル人児童は日本人児童にとって、文化や言語が異なるため明らかに「異質」であり、必然的にいじめが発生しやすいいう問題も考えられる。

そこで本研究では、ブラジル人児童のストレスとレジリエンス（精神的回復力）に注目して、その実態を検討した。レジリエンスとは、困難な状況にさらされても、重篤な精神病理的な状態にならない、あるいは回復できるという、個人の心理面の弾力性を指している[7]。これまでの研究により、日本の中学生においても、レジリエンスが高い状態にある者は、病気や災害などの非日常的なストレスの他に、日常生活におけるさまざまストレス経験を乗り越える因子となりうることが明らかになっている[8)9)]。一般的に、ブラジル人児童は日本人児童に比べ、より強いストレス環境に身

を置いて日本での学校生活を送っていると考えられるため、それに適応するために、困難があっても立ち上がる力であるレジリエンスの実態がどのようになっているかは大変興味深いが、これまでに、滞日ブラジル人児童のレジリエンスについて調べた研究は見当たらない。

そこで本研究では、同じ公立小学校に通うブラジル人児童と日本人児童に対して、このレジリエンスに関する項目と、児童の心身の健康との強い関連が指摘されているセルフエスティーム（自尊感情）[10] を見る項目、さらには、児童の学校生活での現状を把握するために、日常ストレス経験と、いじめられやすさの指標となる攻撃受動性[11] に関する項目からなる質問紙調査を実施し、特に、日本人児童との比較によって、滞日ブラジル人児童の現状を明らかにしたいと考えた。

Ⅱ　対象および方法

１．調査の概要

調査の対象は、愛知県内のＡ・Ｂ小学校の児童5～6年生544名（Ａ小学校：日本国籍285名・ブラジル国籍17名、Ｂ小学校：日本国籍210名・ブラジル国籍32名）であり、有効回答者は521名（有効回答率95.8％）であった。調査の期間は、2009年10月中旬から10月下旬にかけて、各小学校において実施した。

調査は、無記名自記式質問紙法によって行った。調査用紙は、日本語版とそれをポルトガル語（日本語付き）に翻訳した２種類を用意し、学級担任が、各児童の言語能力に合わせ回答できる言語の調査票を配布して記入させ、その場で回収を行った。日本語調査票のポルトガル語訳は、Ａ小学校の国際教育に携わるバイリンガルの日系ブラジル人教員に協力を得た。また、調査項目の適切さと回答可能性を高めるため、調査対象校の校長および教員の協力を得て、各項目内容のチェックをお願いした。今回の研究に使用したアンケートは、小塩らによる精神的回復力尺度（レジリエンス尺度）[12]、藤田らによる攻撃受動性尺度[13]、Rosenberg によるセルフエスティーム全般性尺度[14]、および、中村らによる日常ストレス尺度[15] である。対象者がブラジル人児童か日本人児童かは、両者の調査用紙が異なることから判別可能であるため調査項目に含まれていない。学年と性別は自記式で記入させて調査した。

２．調査項目

(1) レジリエンス尺度

児童のレジリエンスの測定は、小塩ら[12] が、先行研究を参考に作成した精神的回復力尺度の作成のための質問項目24項目から、筆者らが代表的な質問9項目を選んで行った。小塩らの大学生を対象とした報告の因子分析結果では、レジリエンスの下位尺度として、「新奇性追求」「感情調整」「未来志向」の３つが示されているため、それぞれの下位尺度の因子負荷量上位3項目ずつ（全部で9項目）を選んでレジリエンスの指標とした。なお、本調査の実施に当たり、小学生への質問として適した表現に若干修正して使用した。具体的な質問内容は、「いろいろなことにチャレンジすることが好きだ」「新しいことや珍しいことが好きだ」などの新奇性追求項目と、「自分の感情をコントロールできるほうだ」「動揺しても自分を落ち着かせることができる」などの感情調整項目と、「自分の未来にはきっといいことがあると思う」「将来の見通しは明るいと思う」などの肯定的な未来志向項目から構成されている（表３にすべての質問項目を記載）。

(2) 攻撃受動性尺度

攻撃受動性の測定には、藤田ら[13] が作成し原ら[11] が中学生に適用して妥当性を検討した「攻撃受動性尺度」の19項目を、小学生への質問として若干修正ものに変更して使用した。具体的な質問内容は、「かんしゃくを起こされやすい」「八つ当たりされる」「汚い言葉で攻撃される」などといった直接的な攻撃受動項目と、「仲間はずれにされる」「陰口を言われる」などといった間接的な攻撃受動項目、および、「テストではいい点を取りたい」「勉強では友達に負けたくない」などの勉強志向・競争心の項目から構成されている。

(3) セルフエスティーム尺度

セルフエスティームの測定には、Rosenberg の「全般」尺度の日本語版[14] の10項目を使用した。具体的な質問内容は、生活の満足感、自己の長所への気づき、人間関係の中の役割意識、行動面でも失敗への不安などを取り上げている。

(4) 日常ストレス

日常ストレスの測定には、先行研究をもとに、中村ら[15] が作成したストレスに関する質問31項目から、著者らが不適切と判断した1項目（「学校を落第した」）と、小学校教員が小学生の回答上不適切と判断した2項目（「ボーイフレンドやガールフレンドと別れた」「身近な人が重い病気になった、または亡くなった」）を削除し、小学生への質問として適した表現に変更して使用した（全28項目）。

３．分析方法

調査の集計と統計解析は、統計パッケージソフト「SPSS ver.16」を用いて行った。各項目における回答割合の比較においては χ^2 検定を、2群間における平均値の差の検定には t 検定を行った。各得点間の相関は Pearson の相関係数の検定を行った。なお、各尺度の集計方法は次の通りである。

(1) レジリエンス

レジリエンス尺度9項目は、「はい」「どちらかというとはい」「どちらでもない」「どちらかというといいえ」「いいえ」の5段階で回答させた。高得点ほどレジ

リエンス得点を高くするため、段階順に5点～1点に点数化し、８の「イライラするとおさえられなくなる」は逆転項目として、段階順に1点～5点とした。集計は下位尺度ごとに得点を合計した上で､9項目全部の合計をレジリエンス得点とした。

(2) 攻撃受動性

攻撃受動性尺度19項目は、「かなり当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」「ややちがう」「まったくちがう」の5段階で回答させた。高得点ほど攻撃受動性得点を高くするため、段階順に5点～1点とし、すべての合計を攻撃受動性得点とした。

(3) セルフエスティーム

セルフエスティーム10項目は、「そう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「そう思わない」の4段階で回答させた。高得点ほどセルフエスティーム得点を高くするため､段階順に4点～1点に点数化し､２､５、６，８，９の5項目は逆転項目として、段階順に1点～4点とした。すべての合計をセルフエスティーム得点とした。

(4) 日常ストレス

日常ストレス28項目は、「とても大変」「大変」「まあ平気」「まったく平気」「経験したことがない」の5段階で回答させた。高得点ほど日常ストレス得点を高くするため、段階順に5点～1点に点数化した。日常ストレスの経験率については、「経験したことがない」以外の「とても大変」+「大変」+「まあ平気」+「まったく平気」の合計の割合で示した。そのうち、「とても大変」+「大変」の割合を別に集計した。また、各項目すべての点数の合計を日常ストレス得点とした。

Ⅲ　結果

１．日常ストレス経験の経験率と深刻な経験の有無

表１は、児童の日常ストレスの経験率を項目ごとに示したものである。ブラジル人児童が多く経験していた項目は「自分のやりたくないことをしなければならなかった」「周りで何が起こっているのか分からなかった」「試験や試合などで失敗した」がいずれも82.6%、次いで、「自分の性格のことで悩んだ」(80.4%)、「自分の将来のことで悩んだ」「父親が仕事のため家にいる時間が少なくなった」「誰も大切な話を聞いてくれなかった」がいずれも78.3%と続いていた。

このうち、「自分のやりたくないことをしなければならなかった」「周りで何が起こっているのか分からなかった」の2項目では日本人児童と有意な差は見られなかったが、「試験や試合などで失敗した」「自分の性格のことで悩んだ」「自分の将来のことで悩んだ」「父親が仕事のため家にいる時間が少なくなった」「誰も大切な話を聞いてくれなかった」の5項目はいずれも日本人児童と比べて有意に高い経験率であった。その他に「友達や親のトラブルに巻き込まれた」「自分がやりたいことを中断させられた」「親の仕事が変わった」「誰かにひどくいじめられた」「自分が重い病気になった」「転校した」の各項目も日本人児童に対してブラジル人児童の経験率が有意に高かった。

これに対して、日本人児童の方がブラジル人児童より経験率が有意に高かった項目は、「自分のやりたく

表１．日常ストレスの経験率（ブラジル人児童と日本人児童の比較）

日常ストレス経験 ＼ 国籍	ブラジル 順位	ブラジル N (%)	日本 順位	日本 N (%)	国籍比較 χ^2検定
7　自分がとても望んでいたことができなかった	1	38 (82.6)	4	343 (72.2)	
5　周りで何が起こっているのか分からなかった	1	38 (82.6)	6	329 (69.3)	†
13　試験や試合などで失敗した	1	38 (82.6)	8	318 (66.9)	*
10　自分の性格のことで悩んだ	4	37 (80.4)	10	311 (65.5)	*
2　自分の将来のことで悩んだ	5	36 (78.3)	12	293 (61.7)	*
12　父親が仕事のため家にいる時間が少なくなった	5	36 (78.3)	15	276 (58.1)	*
1　誰も大切な話を聞いてくれなかった	5	36 (78.3)	16	265 (55.8)	**
9　自分のいったことや行動で他の人をがっかりさせた	8	34 (73.9)	7	323 (68.0)	
22　急にたくさんやらなければいけないことができた	8	34 (73.9)	9	315 (66.3)	
20　友達とうまくいかなかった	8	34 (73.9)	11	304 (64.0)	
23　自分が失敗するのではないのかと心配になった	11	33 (71.7)	2	382 (80.4)	
14　自分の成績のことで悩んだ	12	32 (69.6)	3	349 (73.5)	
16　母親が仕事を始めた	12	32 (69.6)	5	334 (70.3)	
15　友達や親のトラブルに巻き込まれた	12	32 (69.6)	19	234 (49.3)	**
24　自分がやり始めたことを中断させられた	15	31 (67.4)	19	234 (49.3)	**
3　自分のやりたくないことをしなければならなかった	16	30 (65.2)	1	392 (82.5)	**
11　自分の大切なものを失った	16	30 (65.2)	13	287 (60.4)	
25　親の仕事が変わった	16	30 (65.2)	23	207 (43.6)	**
6　自分の顔やスタイルのことで悩んだ	19	28 (60.9)	14	277 (58.3)	
17　誰かにひどくいじめられた	19	28 (60.9)	25	183 (38.5)	**
4　引っ越しをした	21	27 (58.7)	17	242 (50.9)	
18　何か大きな決心をしなければならなかった	22	26 (56.5)	22	211 (44.4)	
21　弟や妹が生まれた	23	25 (54.3)	21	213 (44.8)	
26　学校の先生とうまくいかなかった	23	25 (54.3)	24	202 (42.5)	
19　自分が重い病気になった	23	25 (54.3)	27	126 (26.5)	**
8　転校した	26	24 (52.2)	28	90 (18.9)	**
28　親とけんかすることが増えた	27	22 (47.8)	17	242 (50.9)	
27　両親がよくけんかをする	28	15 (32.6)	26	158 (33.3)	

註 1)　$\chi 2$検定，df = 1，†: $p < 0.10$，*: $p < 0.05$，**: $p < 0.01$
註 2)　日常ストレス体験は、ブラジル人児童の経験割合が多い順に掲載し、国籍別に比較した。
註 3)　日常ストレス体験各項目の回答は、１．経験したことがない、2．まったく平気、3.まあ平気、4大変、5．とても大変、の5段階で行わせ、1.以外の回答を経験ありとした。
註 4)　各質問についた数字は、アンケートで質問を並べた順番を示す。

表２．各日常ストレスにおける「大変」「とても大変」の割合（ブラジル人児童と日本人児童の比較）

国籍 / 日常ストレス経験	ブラジル		日本		国籍比較
	順位	N (%)	順位	N (%)	χ^2検定
19　自分が重い病気になった	1	19 (76.0)	2	80 (63.5)	
11　自分の大切なものを失った	2	21 (70.0)	1	206 (71.8)	
8　転校した	3	16 (66.7)	3	55 (61.1)	
27　両親がよくけんかをする	4	9 (60.0)	15	65 (41.1)	
4　引っ越しをした	5	16 (59.3)	23	78 (32.2)	**
21　弟や妹が生まれた	6	14 (56.0)	24	68 (31.9)	*
12　父親が仕事のため家にいる時間が少なくなった	7	20 (55.6)	17	105 (38.0)	†
17　誰かにひどくいじめられた	8	15 (53.6)	5	108 (59.0)	
14　自分の成績のことで悩んだ	9	17 (53.1)	14	155 (44.4)	
29　親とけんかすることが増えた	10	11 (50.0)	19	87 (36.0)	
24　自分がやり始めたことを中断させられた	11	15 (48.4)	12	106 (45.3)	
25　親の仕事が変わった	12	14 (46.7)	28	48 (23.2)	*
6　自分の顔やスタイルのことで悩んだ	13	13 (46.4)	16	106 (38.3)	
18　何か大きな決心をしなければならなかった	14	12 (46.2)	20	75 (35.5)	
23　自分が失敗するのではないのかと心配になった	15	15 (45.5)	9	197 (51.6)	
9　自分のいったことや行動で他の人をがっかりさせた	16	15 (44.1)	4	192 (59.4)	
22　急にたくさんやらなければいけないことができた	16	15 (44.1)	7	169 (53.7)	
13　試験や試合などで失敗した	18	16 (42.1)	6	176 (55.3)	
7　自分がとても望んでいたことができなかった	18	16 (42.1)	18	125 (36.4)	
15　友達や親のトラブルに巻き込まれた	20	13 (40.6)	10	120 (51.3)	
16　母親が仕事を始めた	20	13 (40.6)	27	80 (24.0)	†
10　自分の性格のことで悩んだ	22	15 (40.5)	11	142 (45.7)	
26　学校の先生とうまくいかなかった	23	10 (40.0)	22	68 (33.7)	
2　自分の将来のことで悩んだ	24	14 (38.9)	21	101 (34.5)	
5　周りで何が起こっているのか分からなかった	25	14 (36.8)	25	102 (31.0)	
3　自分のやりたくないことをしなければならなかった	26	11 (36.7)	13	177 (45.2)	
20　友達とうまくいかなかった	27	12 (35.3)	8	160 (52.6)	†
1　誰も大切な話を聞いてくれなかった	28	9 (25.0)	26	82 (30.9)	

註 1)　$\chi 2$検定，df = 1，†：$p < 0.10$，*：$p < 0.05$，**：$p < 0.01$
註 2)　日常ストレス体験（大変、とても大変）は、ブラジル人児童の経験割合が多い順に掲載し，国籍別に比較した。
註 3)　日常ストレス体験各項目の回答は、１．経験したことがない、2．まったく平気、3.まあ平気、4大変、5．とても大変、の5段階で行わせ、１．以外の回答者のうち、「大変」「とても大変」 と回答した者の割合を集計した。そのため、それぞれの国籍別に見ても、質問項目ごとの全体の人数は一致しない。
註 4)　各質問についた数字は、アンケートで質問を並べた順番を示す。

表３．国籍別に見たレジリエンスの比較

国籍 / レジリエンス	ブラジル	日本	国籍比較
	N (%)	N (%)	χ^2検定
＜新奇性追求＞			
1　いろいろなことにチャレンジするのが好きだ	28 (60.9)	351 (73.9)	†
4　新しいことやめずらしいことが好きだ	39 (84.8)	381 (80.2)	
7　ものごとに対する興味や関心が強い方だ	26 (56.5)	304 (64.0)	
＜感情調整＞			
2　自分の感情をコントロールできる方だ	23 (50.0)	269 (56.6)	
5　パニックになっても、自分を落ち着かせることができる	23 (50.0)	243 (51.2)	
8　イライラするとおさえられなくなる　※	11 (23.9)	184 (38.7)	†
＜未来志向＞			
3　自分の未来にはきっといいことがあると思う	29 (63.0)	306 (64.4)	
6　将来の見通しは明るいと思う	30 (65.2)	302 (63.6)	
9　自分の将来に希望をもっている	29 (63.0)	352 (74.1)	†

註 1)　$\chi 2$検定，df = 1，†：$p < 0.10$
註 2)　レジリエンス各項目の回答は、1．はい、2．とちらかというとはい、3．どちらでもない、4．とちらかというといいえ、5．いいえ、の5段階で行わせた。
註 3)　レジリエンス各項目の「はい」「どちらかというとはい」の割合を表わした。
註 4)　※印は、逆転項目を示し、「いいえ」「どちらかというといいえ」の割合を表わした。
註 5)　各質問についた数字は、アンケートで質問を並べた順番を示す。

ないことをしなけらばならなかった」（日本人児童82.5%、ブラジル人児童65.2%）の1項目だけで、全体として見ると、ブラジル人児童の日常ストレス経験率が高いことが明らかとなった。

表２は､日常ストレス体験の項目ごとに「大変」「とても大変」と回答した児童の割合を示したものである。経験していない児童数を除いた割合（%）であるため、実際に訴える児童数が多くても割合（%）が少ない項目が散見される。この割合は、児童がどのような経験をすると深刻なストレス経験となるかを推定できる数字である。これによると、ブラジル人児童にとって深刻なストレス経験は、「自分が重い病気なった」「自分の大切なものを失った」「転校した」が訴え率の上位3項目であったが、これは日本人児童の訴え率上位3項目と一致しており、これらの割合は国籍の違いで有意な差を認めなかった。

ブラジル人児童が日本人児童に比べてより深刻に感じるストレス項目は、「引っ越しをした」「弟や妹が生

まれた」「親の仕事が変わった」の3項目で、他に「父親が仕事のため家にいる時間が少なくなった」「母親が仕事を始めた」の2項目も有意ではないが、ブラジル人児童の方が「大変」「とても大変」と考える割合が多い傾向が見られた。

こうした日常ストレスの経験と深刻度を加味して得点化したのが日常ストレス得点である。その国籍別比較の結果を表６に示した。ブラジル人児童の日常ストレス得点（平均値±標準偏差）は74.9±20.4であり、日本人児童の65.0±19.2に比べて、有意に高いことが明らかとなった。

２．各尺度の国籍別比較

（１） レジリエンス

表３に、レジリエンス9項目に対して「はい」「どちらかというとはい」と回答した割合を国籍別に示した。「いろいろなことにチャレンジするのが好きだ」「イライラするとおさえられなくなる（※逆転項目:「いいえ」「どちらかというといいえ」の割合）」「自分の将来に希望を持っている」の3項目について、やや日本人児童の割合がブラジル人児童より高い傾向があったが有意な差はなかった。他の項目も有意な差を認めなかった。

各項目を得点化したレジリエンス得点の国籍別比較結果を表６に示した。下位尺度である「感情調整」の得点が日本人児童に比べてやや低い傾向が見られたが有意ではなく、また「新奇性追求」「未来志向」は両者に有意な差は見られず、これらを合計した「レジリエンス得点」にも有意な差はなかった。

（２） 攻撃受動性

19項目からなる攻撃受動性尺度は、これまで、児童が他者からの攻撃を受けやすいかどうか、すなわち、いじめられやすいかどうかを見る指標として使われている。ブラジル人児童が多く「かなり当てはまる」「やや当てはまる」と答えた項目は（表４）、「先生の言うことは、すなおにしたがうべきだと思う」「テストでは少しでもいい点を取りたい」「周りの人は自分のことについて、けっこうかげ口を言っていると思うことがある」「ちょっとしたことで怒られたり、八つ当たりされることがある」「人から、どなられたりすると言い返せないことがある」「自分のまわりにおこりっぽい人がいると、いじめられそうな気がする」の順であったが、これらは、日本人児童にとっても上位となる項目が並んでいた。

しかし、これらが「かなり当てはまる」「やや当てはまる」と答えた児童の割合は、「テストでは少しでもいい点を取りたい」のみ日本人児童が有意に高いものの、他の項目はいずれもブラジル人児童の方が高い傾向を示した。特に、ブラジル人児童が有意に多い項目は、「かげ口」「八つ当たり」「言葉で攻撃」「皮肉」「大声でどなられる」などの直接的な受動項目が多く、また「勉強のため友達と遊ばない」「予習・復習をきちんとやらないと気がすまない」といった勉強志向・競争心の項目が有意に高い傾向が見られた。その結果、これらを得点化した攻撃受動性得点においては、ブラジル人児童の方が日本人児童より有意に高いことが明らかとなった（表６）。

（３） セルフエスティーム

表５は、10項目のセルフエスティームに関する項目に対し、「そう思う」「ややそう思う」（逆転項目の場合は「そう思わない」「ややそう思わない」）と答えた割合を国籍別に比較したものである。ブラジル人児童にとって最も高い割合であった項目は「私は自分が全然だめだと思います（※逆転項目なので、「そう思わない」「ややそう思わない」の割合）であり、この項目のみ、日本人児童と比べて有意に高かった。他の項目については有意な差は認めなかった。

これらを合計したセルフエスティーム得点では、ブラジル人児童と日本人児童との間に有意な差が見られなかった（表６）。

（４） 各尺度の相関

過去の知見から、レジリエンス、攻撃受動性、セルフエスティーム、および日常ストレス得点には相互の関連性がみられることが予想された。そこで、国籍別にこれらの相関関係の検討を行った（表７）。

セルフエスティーム得点と強い相関を示したのは、レジリエンス得点とその下位尺度であり、国籍に関係なく、いずれも強い有意な正の相関関係を示した。一方、日本人児童ではセルフエスティーム得点と攻撃受動性得点および日常ストレス得点は有意な負の相関関係を示したが、ブラジル人児童では有意な関連は示されなかった。

攻撃受動性得点との関連を見ると、日本人児童のみレジリエンス（合計と下位尺度「感情調整」および「未来志向」）とセルフエスティームとは負の有意な相関関係、日常ストレス得点とは強い有意な正の相関関係を示したが、ブラジル人児童では、いずれも有意な相関を示さなかった。

一方、日常ストレス得点との関連では、やはり日本人児童のみレジリエンス（合計と下位尺度「感情調整」および「未来志向」）とセルフエスティームと負の有意な相関関係を示したが、ブラジル人児童では有意ではなかった。しかし、日常ストレス得点とレジリエンスとの関係では、ブラジル人児童（r=-0.276）も日本人児童（r=-0.220）とほぼ同等の相関係数であり、ブラジル人児童の場合、今回は人数の関係で有意にならなかったものの、負の相関傾向が見られた。

表４．国籍別に見た攻撃受動性の比較

国籍 / 攻撃受動性	ブラジル		日本		国籍比較
	順位	N (%)	順位	N (%)	χ^2検定
19　先生の言うことは、すなおにしたがうべきだと思う	1	37 (80.4)	2	348 (73.3)	
9　テストでは少しでもいい点を取りたい	2	36 (78.3)	1	433 (91.2)	*
5　周りの人は自分のことについて、けっこうかげ口を言っていると思うことがある	3	25 (54.3)	5	171 (36.0)	*
1　ちょっとしたことで怒られたり、八つ当たりされることがある	4	21 (45.7)	6	148 (31.2)	*
16　人から、どなられたりすると言い返せないことがある	5	20 (43.5)	4	179 (37.7)	
4　自分のまわりにおこりっぽい人がいると、いじめられそうな気がする	5	20 (43.5)	8	140 (29.5)	†
8　自分はまわりの人から、じゃまでうっとうしく感じられていると思うことがある	7	19 (41.3)	11	112 (23.6)	*
10　イライラをおさえられない人に、いやな言葉で攻撃（こうげき）されることがある	8	18 (39.1)	12	111 (23.4)	*
3　学校の勉強のために友達と遊ばないことがある	8	18 (39.1)	17	84 (17.7)	**
13　いやな人から、皮肉（ひにく）を言われることがある	10	17 (37.0)	13	106 (22.3)	*
7　腹を立てている人から、大きな声でどなられることがある	10	17 (37.0)	15	99 (20.8)	*
15　予習、復習はきちんとやらないと気がすまない	12	15 (32.6)	19	72 (15.2)	**
6　学校の友達に対し、勉強では負けたくない	13	14 (30.4)	3	205 (43.2)	
17　行動には出ないが、人からいじめられるのではないかと気にすることがある	13	14 (30.4)	7	146 (30.7)	
2　集団から仲間はずれにされることがある	15	12 (26.1)	14	105 (22.1)	
14　うらみを長い間もたれやすい	15	12 (26.1)	16	95 (20.0)	
18　友達よりも勉強では、がんばっていると思う	17	9 (19.6)	10	118 (24.8)	
11　表には出されていないが、人からねたまれやすい	17	9 (19.6)	18	75 (15.8)	
12　塾（じゅく）や習い事のために食事時間がぎせいになることがある	19	6 (13.0)	9	119 (25.1)	†

註 1)　$\chi 2$検定，df = 1，†：p < 0.10，*：p < 0.05，**：p < 0.01
註 2)　攻撃受動性各項目の回答は、1．かなり当てはまる、2．やや当てはまる、3．どちらでもない、4．ややちがう、5．まったくちがう、の5段階で行わせた。
註 3)　攻撃受動性各項目の「かなり当てはまる」「やや当てはまる」の割合を表わした。
註 4)　攻撃受動性の割合は、ブラジル人児童の多い順に掲載し、国籍に比較した。
註 5)　各質問についた数字は、アンケートで質問を並べた順番を示す。

表５．国籍別に見たセルフエスティームの比較

国籍 / セルフエスティーム	ブラジル		日本		国籍比較
	順位	N (%)	順位	N (%)	χ^2検定
2　私は自分が全然だめだと思います　※	1	32 (69.6)	6	256 (53.9)	*
10　私は、自分のよい面に目を向けるようにしています	2	29 (63.0)	4	297 (62.5)	
4　私は、たいていの人がやる程度には、物事ができると思います	3	28 (60.9)	2	311 (65.5)	
3　自分にはいくつか長所があると思います	4	27 (58.7)	3	309 (65.1)	
5　私には、あまりに得意に思えることがありません　※	5	26 (56.5)	1	326 (68.6)	
6　私は、自分が役に立たない人間だと思うことがあります　※	6	23 (50.0)	5	296 (62.3)	
7　私は、自分が他の人と同じくらいに、良いところのある人間だと思います	6	23 (50.0)	7	255 (53.7)	
1　私は、すべての点で自分に満足しています	6	23 (50.0)	8	190 (40.0)	
9　私は、自分を失敗しがちな人間だと思います　※	9	19 (41.3)	9	180 (37.9)	
8　私はもう少し、自分を尊敬（そんけい）できたらと思います　※	10	17 (37.0)	10	172 (36.2)	

註 1)　$\chi 2$検定，df = 1，　*：p < 0.05
註 2)　セルフエスティーム各項目の回答は、1．そう思う、2．ややそう思う、3．ややそう思わない、4．そう思わない、の4段階で行わせた。
註 3)　セルフエスティーム各項目の「そう思う」「ややそう思う」の割合を表わした。
註 4)　※印は逆転項目をさし、「ややそう思わない」「そう思わない」の割合を表わした。
註 5)　セルフエスティームの割合は、ブラジル人児童の多い順に掲載し，国籍に比較した。
註 6)　各質問についた数字は、アンケートで質問を並べた順番を示す。

表６　各尺度得点平均値（±標準偏差）の国籍別比較

	ブラジル (N=46)	日本 (N=475)	t検定
●レジリエンス（合計）	32.5(± 6.8)	33.7(± 5.9)	t= 1.256　p=0.210
（下位尺度）新奇性追求	11.6(± 2.5)	12.0(± 2.4)	t= 1.103　p=0.270
（下位尺度）　感情調整	9.3(± 2.5)	10.0(± 2.7)	t= 1.667　p=0.096
（下位尺度）　未来志向	11.6(± 3.2)	11.7(± 2.7)	t= 0.164　p=0.870
●攻撃受動性得点	57.8(±14.4)	51.4(±13.4)	t=-3.046　p=0.002**
●セルフエスティーム	25.8(± 4.8)	26.0(± 5.5)	t= 0.259　p=0.793
●日常ストレス得点	74.9(±20.4)	65.0(±19.2)	t=-3.317　p=0.001**

註 1) 国籍別比較はｔ検定，**：p < 0.01
註 2) レジリエンス各項目の回答は、1．はい、2．とちらかというとはい、3．どちらでもない、4．とちらかというといいえ、5．いいえ、の5段階で行わせ、精神的回復力が大きいほど数値が高くなるように集計した。
註 3) 攻撃受動性各項目の回答は、1．大いに当てはまる、2．やや当てはまる、3．どちらでもない、4．ややちがう、5．全く違う、の5段階で行わせ、攻撃受動性が大きいほど数値が高くなるように集計した。
註 4) セルフエスティーム各項目の回答は、1．そう思う、2．ややそう思う、3．ややそう思わない、 4．そう思わない、の 4段階で行わせ、セルフエスティームが高いほど数値が高くなるように集計した。
註 5) 日常ストレス体験各項目の回答は、１．経験したことがない、2．まったく平気、3.まあ平気、4大変、5．とても大変、の5段階で行わせ、その得点を合計したものを日常ストレス得点として集計した。

表７．国籍別に見た各尺度得点相互の相関関係

		レジリエンス得点	攻撃受動性得点	セルフエスティーム得点	日常ストレス得点
●レジリエンス（合計）	ブラジル	1.000	0.100	0.706 **	-0.276 †
	日本	1.000	-0.165 **	0.583 **	-0.220 **
（下位尺度）新奇性追求	ブラジル	0.800 **	0.086	0.484 **	-0.218
	日本	0.758 **	-0.052	0.432 **	-0.040
（下位尺度）　感情調整	ブラジル	0.764 **	0.040	0.503 **	-0.278 †
	日本	0.710 **	-0.225 **	0.419 **	-0.304 **
（下位尺度）　未来志向	ブラジル	0.893 **	0.112	0.720 **	-0.198
	日本	0.804 **	-0.093 *	0.472 **	-0.144 **
●攻撃受動性得点	ブラジル	0.100	1.000	-0.057	0.104
	日本	-0.165 **	1.000	-0.269 **	0.518 **
●セルフエスティーム	ブラジル	0.706 **	-0.057	1.000	-0.136
	日本	0.583 **	-0.269 **	1.000	-0.296 **
●日常ストレス得点	ブラジル	-0.276 †	0.104	-0.136	1.000
	日本	-0.220 **	0.518 **	-0.296 **	1.000

註 1）数字は相関係数（ｒ）、検定はPearsonの相関係数の検定、†: $p < 0.10$、*: $p < 0.05$、**: $p < 0.01$
註 2）各対象者の人数は、ブラジル：n=46, 日本：n=475

Ⅳ　考察

１．滞日ブラジル人児童のストレスについて

本研究において、ブラジル人児童の日常ストレス経験率が最も高かったのは、「自分がとても望んでいたことができなかった」「周りで何が起こっているのか分からなかった」「試験や試合などで失敗した」であり、特に、「試験や試合などで失敗した」は日本人児童に比べて有意に高かった。逆に、日本人児童が一番多く経験していた「自分のやりたくないことをしなければならなかった」などは比較的下位であった。また、日本人児童との比較では、その他に、「自分の性格のことで悩んだ」「自分の将来のことで悩んだ」「父親が仕事のため家にいる時間が少なくなった」「誰も大切な話を聞いてくれなかった」「友達や親のトラブルに巻き込まれた」「自分がやりたいことを中断させられた」「親の仕事が変わった」「誰かにひどくいじめられた」「自分が重い病気になった」「転校した」の各項目で、有意に日本人児童より経験率が高かった。

滞日日系ブラジル人の学校適応と親子関係などを調査した谷渕[16]の報告によると、ブラジルの日系人は教育意識が高く、進路希望でも日本人の親に比べて高学歴志向であったことが報告されている。また、日本人に比べて親子の心理的距離が近く、親からの期待を強く感じる子どもが多いことを指摘している。親の関心が高いと思われる「試験や試合での失敗」や「自分の性格」あるいは「自分の将来のこと」を、日本人よりもストレスとして感じやすいという本研究の結果は、これを裏付けるものと考えられる。

また、家庭や家族の事情に関わるストレスが、日本人児童に比べて多いことも特徴である。日常ストレスにおいて「大変」「とても大変」の割合を見ても、日本人児童に比べて多いのは、「引っ越しをした」「弟や妹が生まれた」「親の仕事が変わった」や「父親が仕事のため家にいる時間が少なくなった」「母親が仕事を始めた」などであり、やはり家庭や家族の事情に関わるストレスの深刻度が高いことがわかった。

愛知県下の公立小・中学校で日系ブラジル人児童生徒を調査した朝倉[17]の報告によると、ブラジル人の子どもは、「親の仕事のせいで一緒にいる時間が少ない」ものほど、そして「親が自分を分かってくれないと思う」ものほど、心身のストレス症状が高くなることを報告している。逆に「家族関係のここちよさ」はストレス症状の出現と負の相関を示し、家庭の問題がブラジル人児童のストレスに与える影響の強さを示している。

しかし、それは単に親子の心理的関係ではなく、いわゆる出稼ぎ目的のブラジル人にとって、現在の日本では、明確な将来計画を立てるのが困難[18]で、また実際に、親の長時間労働や共働きが増え、また実際に職場を変わったり、引っ越したりする機会が多くなるという側面もある。実際、今回対象となった滞日ブラジル人児童は、同じ学校に通う日本人児童より、有意に日常ストレス得点が高い結果となった（表６）が、表２に示すように、それぞれのストレス経験を「大変」「とても大変」と答える割合は、国籍ごとの大きな差は見られなかった。つまり、この日常ストレス得点の差は、表１で示したようにそれぞれのストレス経験率の差が主な要因と考えることもできる。すなわち、ブラジル人児童は、親の仕事次第でどこで生活することになるか分からない状態にあり、また、実際に「転校」や「親の仕事が変わった」などのストレスを多く経験しているからこそ、日常ストレス得点が高くなったと考えられる。

２．レジリエンスについて

本研究では、ブラジル人児童のレジリエンス（精神的回復力）を検討する際に、小塩ら[12]の精神的回復力尺度を用いたが、小学生に適用しやすくかつ解釈を簡便にするため、元々の24項目から、代表的な質問9項目を選んで分析を行った。小塩らの大学生を対象とした調査で得られたレジリエンスの関わる３つの下位

尺度（「新奇性追求」「感情調整」「未来志向」）ごとにそれぞれ3項目で構成し、全部で9項目によるレジリエンス得点を算出した。その結果、表６で示したように、いずれの下位尺度も、また合計得点においても、ブラジル人児童は日本人児童と大きな差がないことが明らかとなった。ただし、「感情調整」に関わる得点でブラジル人児童が日本人児童よりやや低くなる傾向が見られた。これは具体的には「自分の感情をコントロールできる」「イライラするとおさえられなくなる（※逆転項目）」等の項目であり、日本人児童よりストレスの多い環境にいる滞日ブラジル人児童の現状ではあり得ないことではない。しかしここでは、むしろ、その他の項目やレジリエンス全体として日本人児童と大きな差がないことに注目すべきであろう。

杉岡[18]は、公立学校での日系ブラジル人児童（小学5～6年生）の「学校適応感」を同年代の日本人児童と比較し、「規制への態度」や「教師との関係」は日本人児童よりもブラジル人児童の適応感の方が有意に高く、他の下位尺度においても日本人児童と有意差は見られなかったことを報告している。筆者は、ブラジル人は楽観的に答えやすいのではないとかと考察しているが、逆に、このように物事を深刻に考えない姿勢こそ、レジリエンスが高い状態とも言える。ブラジル人児童は、客観的に見て明らかにストレスが多い環境であるにもかかわらず、それに耐えて生き生きと生活できるのは、まさにレジリエンス（精神的回復力）が低下していないからであろうと思われる。

３．その他の尺度について

攻撃受動性は、いじめ等の攻撃行動を他者から受けやすい子どもの行動的特徴を示す指標[11]とされる。19項目からなる攻撃受動性尺度のうち、ブラジル人児童が多くあてはまる項目は、日本人児童とそれほど変わらなかったものの、「かなり当てはまる」「やや当てはまる」と答えた児童の割合は、多くの項目でブラジル人児童の方が多かった。その結果、その合計である攻撃受動性得点においては、ブラジル人児童の方が日本人児童より有意に高い結果となった。特に、ブラジル人児童が有意に多い項目は、「かげ口」「八つ当たり」「言葉で攻撃」「皮肉」「大声でどなられる」などの直接的な受動項目が多く、また「勉強のため友達と遊ばない」「予習・復習をきちんとやらないと気がすまない」といった勉強志向・競争心の項目が有意に高い傾向が見られた。

井上ら[6]は、日本人の子どもがいじめを行う理由として多いのは「こらしめ（被害者に何らかの落ち度があると考える立場）」、次いで「異質者排除」、加害者側の恣意的な理由付けによる「不条理」などがあげられている。特に、「異質者排除」は、日本社会にある、同質性を求めて異質なものを排除しようとする国民性[5]と結びつきやすく、生活習慣が異なり、日本語能力の不十分なブラジル人児童が攻撃の対象となることが容易に予想される。そのため、攻撃受動性は、本来、それぞれ個人ごとの「いじめられやすさ」を示す指標であるにもかかわらず、ブラジル人児童にとっては、ブラジル人であることそのものがいじめの対象となる場合もあるため、単に感受性の問題ではなく、実際の経験も多くなりがちで、そのため、尺度得点も高くなってしまった可能性もある。この点は、残念ながら、滞日ブラジル人児童にこの攻撃受動性を尺度として用いる問題点を惹起した。

一方、セルフエスティームとは、人が持っている自尊心（self-respect）、自己受容（self-acceptance）などを含め、自分自身についての感じ方をさしている。自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚・感情である[20]。学校保健分野では、児童生徒のさまざまな健康習慣や健康行動との関連を示唆する報告が相次いで出されており[10)21)22]、学校現場においても、児童生徒の保健指導や生活指導にも広く活用されている。本研究では、セルフエスティーム尺度の10項目のうち、「私は自分が全然だめだと思います」で「そう思わない」「ややそう思わない」の割合が、ブラジル人児童が日本人児童に比べて有意に高かったが、その他の9項目には有意な差が見られなかった。また、合計得点であるセルフエスティーム得点でも、国籍間の差は認めなかった。この結果は、前述のレジリエンスの結果と同様、ストレスの多い環境にいる滞日ブラジル人児童の、生活力の強さを示す結果であったと考えられる。

４．尺度相互の関連について

各尺度の相関関係のうち、まずレジリエンス得点とセルフエスティーム得点の関係を見ると、国籍に関係なく強い正の相関が示された。小塩ら[12]の報告でも、大学生におけるレジリエンスおよびその下位尺度がすべて、自尊心尺度と有意な正の相関を示していた。これは、両者の概念がかなり近いことを示すが、この論文では、自尊感情が、過去のネガティブなライフイベントの経験に影響を受けるのに対して、レジリエンスは、精神的回復力なので、ストレスの影響を受けにくいという点で異なると述べられている。

本研究では、日本人児童の場合、日常ストレス得点とセルフエスティーム得点の間に負の相関を認め、セルフエスティームがストレス経験の影響を受けることが確認されたが、レジリエンスについてもセルフエスティームよりは低いものの、弱い負の相関を認めた。本研究でのレジリエンス得点は簡易的なものであり、これだけで結論を出すのは難しいが、下位尺度では、「新奇性追求」はストレス経験得点と全く相関がなく、「未来志向」の相関はかなり弱い点などから、やはりストレス経験との関連で見ると、セルフエスティーム

とはやや異なる概念であることが確認できた。

これに対して、ブラジル人児童の場合は、日常ストレス得点とセルフエスティーム得点との相関がほとんど無く、むしろ日常ストレス得点とレジリエンス得点の間に若干の相関関係を認めた。日常ストレス得点は、特にブラジル人児童にとって、その多くがやむおえない事由のストレスを受けているので、ストレスの数ではなく、むしろ、ストレスの感受性（その経験を「大変」ととられるか「平気」ととらえるか）の違いが大きいと考えることもできる。そのため、日本人児童と異なる関連を示した可能性もあり、この点についてはさらなる検討が必要である。

一方、攻撃受動性との関係では、過去の知見[11)22)]では、攻撃受動性やセルフエスティームや日常ストレス得点との関連が指摘されているように、本研究でも、日本人児童において、セルフエスティームとの有意な負の相関を認め、また日常ストレス得点と強い正の相関を示した。これに対し、ブラジル人児童では、これらに有意な相関関係を認めなかった。ブラジル人児童の場合は、前述のように、児童全体がいじめられやすさの対象となっている可能性があり、そのような中では、この攻撃受動性得点は、必ずしも感受性を意味せず、その結果、相互の相関関係は示されなかった可能性がある。

以上から、本研究で用いた攻撃受動性得点と日常ストレス得点は、ブラジル人児童にとって、日本人児童とやや異なる意味をもつ指標となった可能性があり、そうした点も含めて、今後、さらなる検討が必要である。

Ⅴ　まとめ

滞日ブラジル人児童のストレスとレジリエンス（精神的回復力）の実態を検討するため、愛知県内の小学校2校に在籍する5～6年生 544名（日本国籍495名・ブラジル国籍49名）を対象に、無記名自記式質問紙法により調査を行った。その結果、以下このことが明らかとなった。

１．滞日ブラジル人児童の日常ストレス経験率が最も多かったのは「自分がとても望んでいたことができなかった」「周りで何が起こっているのか分からなかった」「試験や試合などで失敗した」（いずれも82.6％）であり、特に、「試験や試合などで失敗した」は日本人児童(66.9％)に比べて有意に高かった。他の項目も、ブラジル人児童の経験率の方が高い傾向にあった。

２．日常ストレス体験の項目ごとに「大変」「とても大変」と回答した児童の割合を比較すると、ブラジル人児童にとって深刻なストレス経験の上位は、「自分が重い病気なった」「自分の大切なものを失った」「転校した」であったが、日本人児童と大きな差はなかった。

３．ブラジル人児童が日本人児童に比べて有意に重く感じるストレス項目は、「引っ越しをした」「弟や妹が生まれた」「親の仕事が変わった」「父親が仕事のため家にいる時間が少なくなった」「母親が仕事を始めた」であり、家族や家庭の問題が多かった。

４．日常ストレスの経験と深刻度を加味して得点化した日常ストレス得点では、ブラジル人児童の日常ストレス得点（平均値±標準偏差）は74.9±20.4であり、日本人児童の65.0±19.2に比べて、有意に高かった。

５．レジリエンス（精神的回復力）について、9項目を得点化したレジリエンス尺度では、下位尺度である「感情調整」の得点がブラジル人児童が日本人児童に比べてやや低い傾向が見られたが有意ではなく、また「新奇性追求」「未来志向」は両者に有意な差は見られず、これらを合計した「レジリエンス得点」にも有意な差はなかった。

６.19項目からなる攻撃受動性の各項目では、ブラジル人児童の方が日本人児童に比べて「かなり当てはまる」「やや当てはまる」と答えた項目が多く、これらを得点化した攻撃受動性尺度においても、ブラジル人児童の方が日本人児童より有意に高かった。

７．セルフエスティームの10項目を合計したセルフエスティーム尺度では、ブラジル人児童と日本人児童との間に有意な差が見られなかった

８.セルフエスティーム得点と強い相関を示したのは、レジリエンス得点とその下位尺度であり、国籍に関係なく、いずれも強い有意な正の相関関係を示した。

９．攻撃受動性得点はと日常ストレス得点は、日本人児童のみレジリエンス、セルフエスティームと負の有意な相関関係を示したが、ブラジル人児童では、いずれも有意な相関を示さなかった。これらの指標はブラジル人児童にとって、日本人児童とやや異なる意味をもつ指標となった可能性があり、さらなる検討が必要である。

引用文献

1)　文部科学省：「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受け入れ状況等に関する調査（平成 20 年度）」の結果について、2008

2)　熊﨑さとみ：外国人義務教育就学をめぐる諸問題、信州大学留学生センター紀要、4、139-150、2003

3)　熊﨑さとみ、天野弥生：長野県在住ブラジル人児童生徒の教育問題、信州大学留学生センター紀要、7、83-94、2006

4)　島悟：ライフサイクルを考える、ストレスとこころの健康（島悟編著）、35-39、ナカニシヤ出版、1997

5)　昼田源四郎、松田久美子、四釜美和子、長嶺純子:「いじめ」研究の現状と課題、福島大学教育学部論集、62、71-87、1997

6)　井上健治、戸田有一、中松雅利：いじめにおける役割、東京大学教育学部紀要、26、89-106、1986

7)　石毛みどり：中学生におけるレジリエンスと無気力感の関

係、人間文化論叢、6、243-251、2003
8）石毛みどり、無藤隆：中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連、教育心理学研究、53、356-367、2005
9）長田春香、岩本文月、大泰加奈子、他：中学生の日常的ストレスとレジリエンスの意義、小児保健研究、65（2）、246-254、2006
10）川畑徹朗：セルフエスティーム（自尊心）を育てる、初等教育資料３月号（No.647）、68-71、1996
11）原由梨恵、藤田定、村松常司：中学生の攻撃受動性とセルフエスティーム、社会的スキルに関する研究、学校保健研究、48（2）、158-174、2006
12）小塩真司、中谷素之、金子一史、長峰伸治：ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性―精神的回復力尺度の形成―、カウンセリング研究、35、57-65、2002
13）藤田定、牧真悟：中学生における攻撃受動性行動とセルフエスティーム、生活習慣の相違に関する研究、平成14年度愛知教育大学研究改革・改善プロジェクト報告書、12-47、2003
14）松下覚：Self-imageの研究、self-esteem scaleの作成、日本心理学会、第11回総会発表論文集、280-281、1969
15）中村伸枝、兼松百合子：10代の子どものストレスと対処行動、小児医保健研究、55、第３号、442-449、1996
16）谷渕真也：滞日日系ブラジル人の学校適応、親子関係及び地域参加に関するコミュニティ心理学的調査　―同一地域の日本人親子との比較を中心に―、広島大学大学院教育学研究科紀要　第３部、58、183-192、2009
17）朝倉隆司：日系ブラジル人児童生徒における日本での生活適応とストレス症状の関連―愛知県下２市の公立小・中学校における調査から―、学校保健研究、46、628-647、2005
18）杉岡正典：滞日日系ブラジル人親子の心理意識と学校適応感との関連　－地域間および学校間比較を中心に－、広島大学大学院教育学研究科紀要　第３部、56、263-272、2007
19）清水康太、河尻直、石黒由美子、他：中学生の攻撃受動性と社会的スキルの関係、東海学校保健研究、33（1）、53-67、2009
20）遠藤辰雄：セルフ・エスティーム研究の視座、セルフ・エスティームの心理学､自己価値の探求（遠藤辰雄､井上祥治､蘭千壽編）、8-25、ナカニシヤ出版、1992
21）富田理紗、谷尾千里、村松常司、他：セルフエスティームからみた小学生の日常ストレスと対処行動、愛知教育大学研究報告、51、15-23、2003
22）小島亜希子、村松常司、吉田正、他：中学生の日常ストレスとセルフエスティームに関する研究、愛知教育大学研究報告、54、167-174、2005

（2010年９月１日受理）